

良に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは能生の因闕けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖きなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらざは光明土に到ることなし。真実信の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなはち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。かるがゆえに宗師は、「光明名号をもって十方を摂化したまう。ただ信心をして求念せしむ」(礼讃)と言えり。また「念仏成仏これ真宗」(五会法事讃)と云えり。また「真宗遇いがたし」(散善義)と云えるをや、知るべし、と。

(『教行信証』行巻 真宗聖典一九〇頁)

信心のごっしき業識について

第15組 大眞寺住職

野嶽 彰憲

Text by Akinori Nodake

「信心業識」は宗祖の造語である。『教行信証』の「行巻」に一カ所だけ出てくる。それは『選択集』のいわゆる⁽¹⁾三選の文により念仏は不回向の行であると確認し、さらにその不回向の行であるが故に「真実の行信を獲れば」「この行信に帰命すれば」というように行から「行信」へと展開する大事な箇所である。その論証として従来「光明名号両重の因縁の喩え」と言われている御自釈が述べられる。それが「良に知りぬ、徳号の慈父ましまさずは能生の因闕けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖きなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらざは光明土に到ることなし。真実信の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなはち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。(中略)また「真宗遇いがたし」と云えるをや、知るべし」の文言である。

この文は善導大師の「既⁽²⁾に身を受けんと欲するに、自らの業識を以て内因と為し、父母の精血を以て外縁と為す」の文に依っていることが解る。それでは善導が了解した業識とは如何なるものであったか。そもそも業識は瑜伽唯識の

用語である。善導が引用したのはそれをよく学んでいたからに相違ない。⁽⁴⁾ 従来の解釈では業識とは結生の識のことであり「親と子を結ぶ結生の因縁」と解されている。しかし『俱舎論』では結生とは過去の無明によって結ばれた生と説かれる。無明の為に動じられた識に依って苦を生ずるのである。⁽⁶⁾ アーラヤには結びつくという意味がある。衆生がアーラヤ識を自我なるものと執して束縛されるという結びつきである。この事から善導が内因として「自らの業識」と挙げたのには単に親子の因縁というのではなく無明を背負って生きるという覚悟の表明に他ならないのである。

宗祖はこの事をさらに信心業識という善導にはない造語により新たなる心境を見い出していく。しかし信心は純粹であり業識は不純である。その相反する言葉を一つにして表した宗祖の思いはどこにあるだろうか。凡夫が無明を背負えば潰れてしまう。信心とは無明が破れて晴れ晴れとするのではない。その反対であって無明の闇に向かって恐れることなく歩み続ける力である。即ち涅槃から逆に無明の深さを尋ねて行く親鸞の姿が窺えるのである。⁽⁷⁾ 「如来は外面より見れば光明にして、内面は闇黒である。此の如来の闇黒は誠に如来光明の根本原理にして、如来の真生命は茲に在る。(中略) 然れば則我等胸中の闇黒は則ち我等が如来大悲の胸中の闇室に居るのを証するのである。我等は自己闇黒の苦痛を見る時、深く如来胸中の御心労を恐察せよ。」という曾我先生の言葉と呼応しているのではないだろうか。

註 (1) 『真宗聖典』 一八九頁

(2) 『真宗聖典』 一九〇頁

(3) 『真宗聖教全書』 第一卷四九〇頁

(4) 『教行信証講義』 (山辺習学、赤沼智善共著) 三七七頁

(5) 『国訳大蔵経』 第一卷『俱舎論』 三二八頁

(6) 『アーラヤ識とマナ識の研究』 (ツオンカパ) 一〇〇頁

(7) 『曾我量深選集』 第二卷 三一八頁